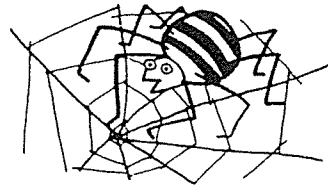


クモとの出会い



三浦義征

“クモ”の観察をしていると本当に楽しいよと言うと、大方の人は空に浮かんでいる雲と思うようである。(東京ではクモと雲は同じ発言でクモとクは同じアクセント)ところがどうして。小生の観察しているのは、老若男女が、嫌がるあのスパイダーなのだ。それを聞いたとたん、眉をひそめ、え☆何☆と軽蔑したまなざしをする。それ程にクモは、いやな動物だろうか。というのは、我家では今現在でも3~4ひきのクモと生活を共にしており、子供も妻もクモに対しては敵意を示さないでくれているからである。教育の問題ではと？

さて、小生とクモの出会いは、1970年2月中旬冬の比較的暖かな日曜日のお昼頃である。当時大宮市に住んでいて、我家の庭の手入れをしていた時である。竹ヤブの枯葉の中から越冬中と思われる7cmもあるショウリョウバッタを発見。その時に大型のクモも発見。雪国育ちの小生にとっては大変なおどろきであった。さっそく、多摩動物園の昆虫博士の矢島稔氏に電話をして、ショウリョウバッタについて質問。答えは「関東地方では日だまりで、かれ草が多く

良い条件の所では時々越冬しているのが見つかるが、これ程大きいのは珍しいとのこと。又、「エサを絶対に与えぬこと」「やったら1週間後に死ぬ」と言われたが、すでにおそし、やってしまった後であった。言っていたとおおり1週間後に死去。

クモと言うと「地表を徘徊するクモは越冬することが多い」とのことであった。さっそく、翌日、浦和市の順原屋書店に向き、保育社の原色日本蜘蛛類大図鑑(追手門大学八木沼健夫著)を購入し、検索。ハンリグモと判明。

それから、クモの生態に興味をいだき、クモとにらめっこを続けて20余年。2時間も3時間も身動きせず観察。他人様が見たら、あの人くるっているのではないかと思うのでは。

クモの話を5分以内の文章にまとめるのは難しい。なぜなら、詳細に書く程、クモに心が引かれ長い文章となってしまうからである。

筆の向くまま、勝手に書いてみよう。

クモは昆虫ではない。節足動物門クモ綱クモ目に分類される。親類といえば、サン

リ目、ダニ目、カニムシ目などで世の中の大半の人から、きらわれている。全世界で35,000種、日本には1,100種生息している。1府県当り200~300種で、東京が340種、大阪230種、鳥取県、栃木県210種の順位で続く。

クモは糸にささえられて生活している点が特徴である。全体の半分は網を張らない徘徊性のクモであるが、このクモでも糸をひきづって（糸を出して）生活している。クモにとって糸はザイルとなり命綱でもある。

クモの性格（勝手に小生がつけた性分のようなもの）を観察していると人間に良く似ている。クモから人間を見れば、オレ達とそっくりと思っているにちがいない。小生からクモを見ていると様々な人間の縮図のような気もする。例えば、母性愛にすぐれたクモ（ハシリグモやカバチコマチクモ）、猜疑心の強いクモ（コガネクモ、ジョロウグモ）、逃げ足の良いクモ（タナグモ）、闘争心の強いクモ（コガネグモ—鹿児島県加治木町はクモ合戦を町のイベントとしており全国的に有名）、夫婦愛の強いクモ（ジグモ）、疑態でカモフラージュし、突然エサにおそいかかるクモ（ハナグモ）、お土産持参で相手の機嫌をとるクモ（ハシリグモ）、身の上に危険が生じたら死んだふりをして、頃合い見て逃走するクモ（オニグモ、他多数）、威嚇行動をとるクモ（ハエ

トリグモ）などである。

一方、求愛（交接）の時期ともなれば、社会性のない孤独な彼等といえども異性を求め、交接のための求愛やリーベもある。代表例を紹介してみよう。

ハエトリグモに見られるような行為で媚態表現型とも言えようか。適当な言葉はない。♀の前に立った♂は手振り、足振り、時々ジャンプを繰り返しダンスをして求婚する（鶴の求愛にしぐさが似ている）。しかし♀はおかまいなく知らんぷりをしてることが多く、何のポーズなのか、両者OKのサインで、その先の行為を見ていないので、もしかしてちがっているかも知れない。

さて、次はハシリグモに見られる、今はやりの贈収賄型である。彼女に近づく時に昆虫のお土産を持参し、そのお土産を夢中になって糸で丸めている間に、エイヤーと目的をはたそうとする、人間の世界でも聞く話ではないだろうか。ジョロウグモ、コガネグモにも、これに似た習性があるが、ことごとく失敗し、♀に食われるか、いちもくさんに逃げ命びろいしているクモもいる。何しろジョロウグモの場合、オスとメスの大きさは、体長で10~20:1のこともあり、ガリバーと小人、のみの夫婦どころではなく、求婚は命からがらの行為であろう。

次にオオヒメグモに見られるような網の

外からノック（サインを出して）をして、了解を得た後に行為に臨むノック型求婚である。無断チン入は、たちどころに♀のエサになってしまふ。おろかな♂である。

求婚で共通していることは、♂が常に♀より立場が弱いことである。

一番親しみを感じるのはジグモに見られる熱愛型である。6～7月頃になると樹や古木の根元に作った住居（管状住居綱）の中に仲良く入っているのが観察される。クモ目の中では珍しく仲むつまじいロマンス型と言えよう。

求婚の話はこのくらいにして、我家で生活しているクモについて紹介しよう。

写真の上はオニグモ、下はヒメグモである。（いずれも1992年2月9日撮影）

オニグモは今年で3年目の春を迎えようとしている。春よ来い、早く来いと思っているのでは。3年も生かすことは、非常に条件が良くなければ、この北国の秋田では難しい。食べ物、温度、湿度などの条件がそろふ必要がある。特に真冬のエサ探しには大変に苦勞する。（1ヶ月に1回、ハエなどのエサ取りに1日中家の中をほっつき歩くか、トイレの中を暖房して、ハエをおびきよせるなどしてエサ探しを行う。（出てきたハエを長時間追って疲れさせとらえる。）又、取ったエサを手でさわって与えたりすると人間の手の雑菌に汚染され、エサを食べたクモは体内で菌が繁殖し死ぬこ

ともある。体力が弱まっているからだと思う。これを防止するためピンセットでのエサ取りとエサやりなど気をつかう。

又、事故防止に気をつけている。フロ場で越冬させているため、長時間フロに入っていると暖気で、クモが天井を徘徊し、フロおけに墜落させ死なせてしまうこともある。悲しい事件である。

今年は暖冬のせいもあり、3年目の春を迎えることが出来た。オニグモや外に網を張るクモの寿命は春に生まれ、秋に死ぬ1年。条件の良い場所にかくれて寿命をのばしても2年と思われる。我家のように3年も生存するのは珍しいのではないかと思っている。ヒメグモは1年目の冬を越せると思うので、大切に育てたいと思っている。

長々クモについて書いたが、長年クモを観察していると人情が移り、あの、おそろしい面相も、可愛く見えてくるのが不思議である。クモには、水面を走るものや、水中に潜るものもあり、生態はまちまちである。どんな世界でも良く観察していると気づかない色々な発見がある。クモの世界も同じである。認識を新たにした人が多くでてくれればこのうえなく幸せである。これからクモを可愛がって下さいね。

（応用地質係）



9.Feb.1992
オニグモ 3年目越冬
Araneus Venteicosus
体長 1 cm



9.Feb.1992
ヒメグモ 1年越冬
Theridion Japonicum
体長 3 mm